

## 山根立庵と丁祖蔭との贈答詩について

——詩作に見られる対外認識を中心に——

福田 忠之

### はじめに

明治時代、清国に渡航・在住した日本人の中に優れた漢詩文の創作能力を備えた人物が多くいたことは周知のとおりである。著名な漢詩人としては、明治三〇年（一八九七）に日本郵船会社上海支社の総経理として赴任した永井禾原（久一郎、荷風の父、一八五二―一九一三）がいるが、禾原が森槐南（一八六三―一九一一）や永坂石埭（一八四五―一九二四）などと共に明治漢詩壇の中枢にいたのとは違い、本稿で扱う山根立庵（一八六一―一九一一）は日本の漢学界や漢詩壇からはほとんど孤立した、当時にあつては比較的無名の人物であった。しかし一方の清国においては、立庵はその優れた漢詩文の素養により多くの文人墨客と交遊しており、日本において無名であったのとは対照的に、清国の士大夫層からは極めて高い評価を得ている。近年、近代日中関係史の研究が進むにつれ、立庵の在中ジャーナリストとしての活動が再認識されつつあるが、その渡清後の漢詩については、現在のところほとんど考察が行われていない。そこで本稿では、立庵の遺稿に収録されている贈答詩、唱酬詩を分析の俎上に載せ、立庵と清末江南の知識人との交流の一端について、考察を行いたいと思う。

## 一 山根立庵とその遺稿

山根立庵は、文久元年（一八六一）、長門（山口県）萩の山田村に生まれた。名は虎之助、または虎臣、字は炳侯とい、号は立庵以外に、深山虎太郎、晴獵雨読居士などがある。幼少より秀才秀拔であったが、中学の時に失聴し、中学校を退学。以後漢籍研究に没頭し、独学で漢詩文の著述能力を身に付けた。後に、自由民権運動に参与する傍ら、地元の山口県で『長州日報』を創刊している。明治三二年（一八九八）春、立庵は上海に渡り、六月には中国で大東汽船会社を設立した白岩龍平（一八七〇—一九四二）の援助により、東亜同文会の機関紙の一つである『亜東時報』を創刊、発刊者兼主筆として健筆を揮った。その後、袁世凱に招聘され保定軍官学堂教習にも就任したが、辛亥革命直前に病により帰国、明治四四年（一九一）八月故郷である山口県萩にて死去した。

立庵の在中ジャーナリストとしての活動に関しては、中下正治著『新聞に見る日中関係史』<sup>(1)</sup>、中村義著『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯』<sup>(2)</sup>がそれぞれ言及している。立庵が主筆を務めた『亜東時報』は、日中の連携とアジアの振興を創刊の趣意にかかげ、章炳麟、宋恕等清国の改良派知識人を糾合して創刊された漢文月刊誌であり、その興亜主義的な性格は立庵の書いた『亜東時報』序によく表れている。<sup>(3)</sup>立庵が祖国日本よりもむしろ清国で敬重されたものには、古典的教養と卓越した漢文作成能力を有していたことに加え、『亜東時報』の主筆として、当時の清国の輿論に一定の影響を与える立場にあったことが大きく影響しているであろう。『対支回顧録』には、『亜東時報』について「明治三十一年、山根虎之助の爲め、白岩龍平、河本磯平等発起人と為り、上海に於て月刊雑誌として発刊したのがそれである。社中には章炳麟、畢永年、宋恕等当時錚々たる支那文士を糾合して大いに支那の時局を論議し、特に立庵の識見文章は卓然として時流を抜き、其の盛名は長江の読書界及び文壇を風靡したものである」<sup>(4)</sup>とある。

一方、漢詩人としての立庵に注目したこれまでの研究としては、入谷仙介著『近代文学としての明治漢詩』第四章「異邦人として」<sup>(5)</sup>、同じく入谷著「山根立庵初期詩注釈」<sup>(6)</sup>がある。前者は漢詩人としての立庵の状況全般について論じたものであり、後者は清国渡航以前の立庵の詩一〇首を詳細に紹介するが、清国渡航後の詩には触れていない。管見の限りでは、立庵の漢詩に言及している主な研究は上記二点のみである。

立庵に関する基本史料としては『立庵詩鈔』（上下二巻、一冊）と『立庵遺稿』（全六巻、上下二冊）の二つが現存する。以下、まずはこの二つの基本史料について簡単に紹介しておく。

『立庵詩鈔』は立庵が没した約半年後の明治四五年（一九一二）一月に刊行されており、奥付には、編次兼発行者が在清国天津中村常三郎、印刷所が大阪市東区本町一丁目三十番地屋敷大阪国文社、印刷者が中山宗次郎とある。巻首に立庵の肖像写真を掲げる。巻上と巻下はそれぞれ「晴嵐雨読園贖稿」、「庚子游蘇詩稿」と題され、巻末には「増録諸家応酬作」及び周岸登序を収録する。一方、『立庵遺稿』は、大正六年（一九一七）五月に刊行。巻一から巻四が上冊で漢詩を収める。巻一と巻三は詩鈔巻上の「晴嵐雨読園贖稿」及び巻下の「庚子游蘇詩稿」を収録。巻二は「虞山唱酬集」と題され、詩鈔にはその中の一首のみを収める。巻四は特に題は付されていないが、日本人に贈った漢詩がその大半を占め、最後に詩鈔巻末の「増録諸家応酬作」を「諸家贈言」と題して収録。巻五と巻六が下冊。巻五は清国の時事を論じた論稿、巻六は清国人への書簡、知人のために書いた文章、友人の遺稿に寄せた序などを収録。遺稿の巻頭に掲載されている二つの序はいずれも中国人によって書かれたものであり、一つは丁祖蔭、もう一つは周岸登。丁序は民国元年（一九一二）秋八月撰、周序は光緒乙巳（一九〇五）春季撰。周序は詩鈔の巻末に掲載された周岸登の序と同じものである。巻末に白岩龍平の跋が附されている。その奥付によれば、編纂者は白岩龍平、発行兼印刷者、発行所はいずれも東京市芝区桜川町二十番地東亜実進社、代表者は角谷八平次。白岩跋によれば、『立庵遺稿』は、はじめ立庵の死を惜しんだ朋友の漢詩人西田鳴溪がその詩文を収集して編纂していたが、鳴溪の突然の死により作業が中断してしまい、そこで二人と縁のあった白岩が編集を引き継ぎ、完成さ

せたものであるという。<sup>(7)</sup> 西田鳴溪（一八六二—一九一六）は本名を龍太といい、長崎県平戸の人。主な詩作集に『鳴溪先生詩集』（大正七年、一九一八年刊）が現存する。明治三十三年（一九〇〇）、鳴溪は上海に渡航し、東亜同文会が創設した上海東亜同文書院（もと南京同文書院、院長は根津一）の教師兼舎監を務めたが、明治三十七年（一九〇四）には、袁世凱により保定軍官学堂の翻訳官として招聘された。<sup>(8)</sup> ちょうどこの頃、『亜東時報』はすでに廃刊となっており、立庵も保定軍官学堂に職を奉じていたため、立庵とは恐らくこれをきっかけに親交を深めたのであろう。鳴溪との唱和の作として、遺稿巻四に「訪西田鳴溪於保定時逢中秋置酒賞月醉作」、「戲題寫真贈西田鳴溪」、「鳴溪飲千代本樓有詩見寄感旧而作」三首を収める。また鳴溪の作として、立庵死去の際に詠んだ輓詩「哭山根立庵」が、『対支回顧録』の鳴溪の列伝に収められている。<sup>(9)</sup> 遺稿の発行元である東亜実進社は角谷八平次（一八七九—一九一九）が設立した出版社であるが、その前身は東亜同文会が中国調査活動の部署として同会内に置いていた支那通信部であり、同出版社からは、『支那研究叢書』全九巻や『続支那研究叢書』全三巻など、東亜同文会による中国調査関連の書籍が多く刊行されている。また角谷は上海東亜同文書院の第二期卒業生でもあり、東亜同文会の創立メンバーの一人でもあった白岩とは当然旧知の間柄であったと思われる。したがって、『立庵遺稿』は、白岩がその編集を終えた段階で、東亜実進社の角谷に出版を委託し、刊行される運びになったものと推測される。詩鈔、遺稿ともに「非売品」として刊行されたものであり、現在はいずれも一橋大学附属図書館に所蔵がある。また前述したとおり、詩鈔所載の詩作は後に刊行された遺稿に全て再収録されており、文献的価値としては遺稿の方が高いと言える。

明治三十一年（一八九八）六月、上海で『亜東時報』を創刊した立庵は、そこで健筆を揮う傍ら、清国人士や在清活動家との交遊を楽しみ、政論や世事を談論した。特に、その卓越した漢詩文の才能により、章炳麟、文廷式、汪康年、李盛鐸、宋恕など当代一流の改良派知識人たちと交わりがあった。『亜東時報』の創刊に共に携わった宋恕は、立庵について「立庵居士、是曰是、非曰非、其性情与僕同、其議論合我意者、亦有十之六七。過從既久、信其拔俗千尋、非某某等専求媚於此邦貴

人者類也<sup>①</sup>」として、その人柄と識見を評価している。また、永井禾原の詩を収めた『西游詩統稿』には「與綬絳伯元惜香立庵淮陰飲天香閣席上贈伯元」、「己亥歲晚回国汪甘卿李伯元文実甫設別筵双清仙館席間次山根立庵送別原韻言懷兼誌別」等の詩題が見られ、立庵の清国における交友関係の広さがうかがわれる。

当時、清国の人士の中でも特に立庵と親交の深かった江南の知識人の一人に常熟の丁祖蔭がいる。『立庵遺稿』に丁が序文を寄せていることから、その親交ぶりがうかがわれる。丁に関しては、以前、拙稿<sup>②</sup>で清末における江蘇常熟の教育界の状況について言及した際に紹介したことがあるが、丁と在華日本人との交流については、改めて検討する必要があるものと思われる。

丁祖蔭（一八七一—一九三〇）は、江蘇省常熟県琴川の人。字は芝孫、号は初我。江陰の南菁書院にて学び、清末の大儒黄以周（一八二八—一八九九）に師事した。光緒二四年（一八九八）には、常熟県内最初の近代式学堂である中西学堂を創設している。また丁は江蘇省全域の教育事業統括機関として光緒三二年（一九〇六）に上海に設立された江蘇教育總會の会員であり、宣統元年（一九〇九）、立憲改革の一環として全国各省に諮議局が開設されると、常熟県代表として江蘇諮議局議員に選出された。さらに常熟県内においては、自治公所総董、勸学所総董、教育会会長等の要職を歴任し、民国元年（一九一二）には、常熟県民政長にも推挙されている。その生前の風貌を伝えるものとして、南京図書館に「常熟丁府君墓誌銘」の拓本が所蔵されているが、そこには次のように記されている。

光緒甲午庚子間、世變益亟、闇時務者率深閉固拒、敝帚自珍。君独聯合同志、倡設中西学堂於城中。（中略）後風氣日開、常熟禁煙、勸学、県自治次第発軔皆以君為之魁、江蘇初設諮議局當選為議員、又斥私財独力開辦丁氏小学校、造就学子無慮千百、終其身不渝、人有所求、未嘗不量力扶助而不以為功、鄉里有爭端、得君一言立解、其素所樹立者然也。<sup>③</sup>



右の墓誌銘に「常熟、煙を禁じ、学を勧め、県自治次第に発軔はつじんするは、皆君を以つて之が魁さきがけと為す」とあることから分かるように、丁は主に清末民国期の江蘇常熟における新教育界の形成と地方自治の推進において、大きな役割を果たした人物であった。

そこで以下では、この丁祖蔭と立庵との交遊の事跡について、二人の間で贈答、唱和された詩作を中心に、検討を進めていくことにする。

## 二 立庵と丁祖蔭の詩の交流

渡清後まもない明治三二年（一八九八、戊戌）の秋、立庵は呉門（蘇州）で丁祖蔭と知り合い、その後丁の招きにより、友人荒井凶南を伴って常熟の虞山に遊んだ。その時に贈答された漢詩が『立庵遺稿』巻二に「虞山唱酬集」と題して収められており、立庵の詩五首、丁祖蔭の詩十首、凶南の詩四首、それ以外に聯句五首が含まれる。詩題を列挙すると、「北郭小飲贈中西学堂諸友」、「中西学堂夜飲贈丁祖蔭」、「錢氏酒園作」、「尚湖和丁芝孫韵」、「次韵酬丁祖蔭」（以上は立庵作）、「八月十七日與荒井益、山根虎臣、香月梅外飲中西学堂縦談時事酒半感賦」、「與山根虎臣、荒井益、香月梅外同遊破山寺登救虎閣作」、「錢氏酒樓小飲山根先生属唱大江東去曲書此代之」、「山根先生、荒井、香月諸君同飲余家各有贈什即步原韵奉和」、「泛舟尚湖足弱不能登劍門舟中口占兩絶」、「復用前韵」、「長亭一別相見何時賦此作唱和尾聲」、「九月七日贈山根虎臣」、「又贈山根虎臣」、「感懷贈山根虎臣荒井益」（以上は丁祖蔭作）、「錢氏酒園戲賦」、「席上作」、「和韵留別」、「次韵答丁芝孫」（以上は凶南作）などがある。尚、現在上海図書館には丁祖蔭撰『丁初我日記』の稿本が所蔵されているが、常熟の教育会や自治公所での公務に関する記述がほとんどであり、私的な交友関係については、全く記述されていない。また現存する『虞陽

『説苑』や『淑照堂叢書』等の丁祖蔭の膨大な著作の中にも立庵との間で応酬された詩文などは収められておらず、したがって、立庵と丁との交遊を示すものとしては、この「虞山唱酬集」がほとんど唯一の資料ということになる。

荒井凶南（一八六五—一九〇二）は下総国佐倉の人。本名は甲子之助、字は益、凶南はその号である。凶南に関する資料としては、明治三六年（一九〇三）に刊行された『凶南遺稿』（全三卷）が現存する。<sup>(15)</sup>これは凶南の死後、天津にいた立庵がその論説、詩文、日記などを集めて、刊行した凶南の漢文遺稿集であり、中国では南京図書館が所蔵、日本では国文学研究資料館に所蔵がある。奥付がないため、出版社、出版地ともに不明。序は二つあり、一つは立庵撰、もう一つは丁祖蔭撰。凶南が渡清後の立庵にとって、最も親しい同胞の一人であったことは、『凶南遺稿』の刊行自体が立庵の提案によるものであり、立庵が『凶南遺稿』序の中で「余交遍湖海而患難與共莫凶南若<sup>(16)</sup>」と記していることからもうかがい知ることができよう。

明治三十一年（一八九八）秋、立庵一行は常熟到着後、丁祖蔭の手厚い歓迎を受け、同年県内に開設されたばかりの中西学堂を訪れた。この中西学堂については、常熟の地方志である『重修常熟志』に次のように記されている。

邑人丁祖蔭、潘任、季亮時等於光緒二十三年間集合同志、創設中西学社於城東学愛精廬、旋由昭文知県李鵬飛撥給別峯菴為社廬、並以捐款改建藏書楼、度置図籍以供学者肄講。次年増設蒙学一所、発起人自任教授者両年余、旋併学社改為中西学堂、推広校舍、規模粗具。曾樸、張鴻輩相與助其成。<sup>(17)</sup>

中西学堂の創設は常熟における近代教育の嚆矢とも言えるものであった。その前身は、光緒二三年（一八九七）に旧書院内に開設された中西学社であり、この学社は丁祖蔭等開明的な地方エリート主導のもと、新式学問の攻究を目的に設立された一種の学術サロンであったと思われる。その翌年、学社内に蒙学が増設され、中西学堂と改名された。

立庵はこの学堂の創設に携わった丁祖蔭、季亮時等の地方紳士を前に「北郭小飲贈中西学堂諸友<sup>(18)</sup>」と題して、次のように吟じている。

劍門風景我曾聞

劍門の風景 我曾て聞く

邂逅諸公交有神

諸公に邂逅し 交わりて神あり

贏得此游好詩料

贏ち得たり 此游の好詩料

夢中山水意中人

夢中の山水 意中の人なり

「劍門」とは、虞山にある劍門峰のこと。「虞山唱酬集」所収の詩作の中、この一首だけは『立庵詩鈔』にも収録されており、詩の後ろに「劍門風月一別三年、讀此詩至末句、感情無限、又引我以家山之夢矣<sup>(19)</sup>」という評語が付されているが、評者は未詳。立庵は夜、中西学堂で丁と酌み交わしながら、常熟での再会の喜びを「乘興飄然訪戴来、輪困肝胆一時開<sup>(20)</sup>」（興に乗り飄然と戴を訪ね来れば、輪困たる肝胆 一時に開く）と詩に託した。立庵と丁の親交ぶりは常熟県北東の尚湖と横塘に遊んだ時に詠んだ以下の詩によく表れている。

尚湖和丁芝孫韵<sup>(21)</sup>（立庵）

黄雲滿目穠樞秋

黄雲 滿目 穠樞の秋

蓼紅蘋白明沙渚

蓼紅 蘋白 明沙の渚

解道江南年方豊

江南を解道するに 年方に豊かにして

鷄栖豚柵出笑語

鷄栖 豚柵 笑語出づ



堪笑吾曹硯田荒  
海外泛宅無建樹  
湖光山綠尚流連  
欲向城中忘去路

笑うに堪えん 吾曹 硯田の荒るるを  
海外 泛宅 樹を建つることなし  
湖光 山緑 なお流連せるに  
城中に向かわんと欲するも去路を忘る

復用前韵(22) (丁祖蔭)

横塘十里如名画  
一碧迷茫失沙渚  
山青不断天欲秋  
蘆白無人鴈自語  
笑携瀛客駕扁舟  
此行遠道思雲樹  
何時同蹈鯨波東  
大呼徐福牽袂去

横塘十里 名画の如し  
一碧迷茫 沙渚を失う  
山青 断えず 天 秋ならんと欲し  
蘆白 人無く 鴈 自ら語る  
笑いて瀛客を携え 扁舟を駕すれば  
此行の遠道 雲樹を思ふ  
何れの時にか同に蹈まん 鯨波の東  
徐福を大呼し 袂を牽きて去かん

このように立庵と丁祖蔭は詩歌の応酬を通じて、互いの親交を深めていったようである。立庵と丁祖蔭との交友関係は、この常熟での交遊後も続いている。例えば、館森袖海（一八六四—一九四二）撰「姑蘇記遊」には、明治三四年（一九〇一）二月に、立庵が館森を伴って、常熟に丁を訪ねた時のことが記されている。当時の情景を伝える貴重な資料でもあるので、以下、その一部を引用しておく。

(明治三十四年二月)五日、立庵謂往游常熟、予喜諾。至閩門、買舟向常熟、一帆駕風、抵吳塘泊焉、是夜月色朧明、揭篷酌酒賞翫、不覺至三鼓。六日、拂曉解纜、直入常熟景城。丁祖蔭來迎、此立庵熟友也。偕入其家。丁氏與諸同人謀、勸中西學堂、專以育才。學堂書目、尚有大日本史、万国史記諸書。(中略)季亮時、王兆麟來謁、皆祖蔭友也。開酒供餐、導至虞山、虞仲居此、故名云。祠廟擁麓簇立、岳廟最盛(中略)(七日)訪祖蔭。以其所著万国公法釈例及琴川三志補記見貽。予問古書、祖蔭曰虞山本有義書、髮匪乱後、飄散殆尽、惟瞿氏如故。亮時、兆麟偕至。予欲見翁同和、問可見生客否。亮時曰、自罷相歸來、退居西山之鵠峰、專以文字自娛。有自警語六、不見生客、其一也。勸予游劍門破山。予久聞其勝、以天氣惡寒辭之。亮時謂今夕獻一勺、又辭。立庵曰莫負朋友盛意、即夜赴宴。亮時篤學士也、謂他日作神山蓬島之游、又問再游有期否、即期後会而別、臨別贈海虞芸文志。<sup>(23)</sup>

館森は日清戦争が終結した明治二八年(一八九五)、台湾に置かれた総督府の文書課に職を奉じ渡台するが、明治三三年(一九〇〇)、官を辞して単身清国に留学した。主な漢文著作集として、『拙存園叢稿』全八卷(大正八年、一九一九年刊)が現存する。「姑蘇記遊」とは、館森がこの清国留学中に立庵に伴われ、江南各地を旅した時の紀行文である。これに拠れば、立庵一行は常熟で丁祖蔭、季亮時、王兆麟等の歓迎を受け、館森は丁の自著である『万国公法釈例』と『琴川三志補記』を贈られている。館森が面会を申し出た翁同和(一八三〇—一九〇四)は、状元であり、同治、光緒二代の帝師を務めた人物であるが、この時には戊戌の変法運動時に維新派を支持したとして、すでに「開缺回籍」に処されていた。「瞿氏」とは、古里鎮にある鉄琴銅劍樓(蔵書樓)の楼主である。この館森の記述から、一回目の常熟訪問以降も、立庵と丁等常熟の文人との間の交遊が続いていた様子がうかがわれる。

『立庵遺稿』巻二の「虞山唱酬集」に収録されている贈答詩の内容からは、当時の清国情勢に対する丁祖蔭、立庵等の認

識についてもうかがうことができる。例えば、丁は、「八月十七日與荒井益、山根虎臣、香月梅外飲中西学堂縱談時事酒半感賦<sup>(24)</sup>」と題して次のように詠んでいる。

旭日当陽燭魑魅

旭日きよくしつ 当陽とうよう 魑魅ちみを燭てらし

愁来風雨驟難披

愁来 風雨 驟にわかかに披ひらき難し

賈生痛哭屈原死

賈生かせい 痛哭す 屈原の死

賸得狂懷付酒卮

賸あまり得たる狂懷きょうかい 酒卮しゆしに付す

詩題からも分るとおり、この詩は一〇月二日（旧曆八月十七日）、中西学堂で時事問題について、立庵、凶南等との談話中に詠んだものである。この一二日前の九月二日（八月六日）、北京では光緒帝、康有為、梁啓超らによる変法維新運動が、后党のクーデターにより挫折させられ、九月二八日（八月十三日）には、譚嗣同等改革派六名が処刑されるというショッキングな事件が起きている。「賈生痛哭屈原死」という一句から分かるように、この詩は明らかに変法維新への弾圧に対する義憤の情を表現したものである。因みに、「賈生」は漢の文帝に用いられた賈誼のこと。後に公卿たちのそねみを買い、長沙王の太傅に左遷された。賈誼が左遷先の長沙に到り、自らの不遇を、世に用いられなかった憂国の詩人屈原に重ね合わせて、「弔屈原賦」を作ったことはよく知られている。

維新運動の挫折に対するこのような慨嘆の情は立庵の漢詩からも見て取ることができる。常熟で詠んだものではないが、戊戌の政変直後に立庵は「輓六士詩」と題する、政変によって処刑された楊深秀、劉光第、譚嗣同、林旭、楊銳、康広仁の所謂「六君子」一人一人に対する輓詩を作り、その死に対する悲痛な思いを書き残している。この「輓六士詩<sup>(25)</sup>」は『立庵詩鈔』巻上及び『立庵遺稿』巻一の「晴獵雨読園賸稿」に収録されている。例えば、譚嗣同については、次のような輓詩を残

している。

就義従容白刃前

義に就きて従容たり 白刃の前

肯将賦命問青天

肯えて賦命を將つて青天に問わん

論追酌古文無匹

論 古を追酌し 文 匹無く

学溯求仁書必伝

学 仁を溯求し 書 必伝す

為君子儒兼古侠

君子儒たりて 古侠を兼ね

宗慈悲仏異狂禪

慈悲仏を宗め 狂禪に異なれり

自從柴市文山死

柴市 文山 死してより

碧血痕新六百年

碧血 痕 新し 六百年

「文山」とは、元朝への投降を最後まで拒否し、殉国した南宋の丞相文天祥（一二三六—一二八二）を指す。因みに、文天祥が刑死した場所は、譚嗣同等と同じ北京の菜市口（当時は柴市口）であった。また康有為の弟である康広仁については、次のように詠んでいる。

読書万卷彼何功

読書 万卷 彼 何の功

嶺表成仁独有公

嶺表 仁を成したるは 独り公有り

堪痛残骸委溝壑

痛みに堪えん 残骸 溝壑に委ちたり

但余怒氣薄蒼穹

ただ余怒の氣 蒼穹に薄るのみ

洛陽無客哭彭越

洛陽 彭越ほうえつを哭す客無く

許下何人埋孔融

許下 何人か 孔融こうゆうを埋めん

筑離軻歌今不再

筑離 軻歌 今は再びせず

誰過燕市弔孤忠

誰か燕市よきを過りて 孤忠こしゅうを弔わん

「彭越」は秦末期、劉邦に仕えた武将。前漢成立後、劉邦の猜疑と臣下の讒言により処刑された。「孔融」は後漢末期の儒者で、曹操により処刑されている。「筑」は古代の弦楽器、「離」は高漸離、「軻」は荊軻を指す。『史記』刺客列伝には、燕の太子丹が荊軻を刺客として秦に送り出す時の様子について、「太子及賓客知其事者、皆白衣冠以送之。至易水之上、既祖取道、高漸離擊筑、荊軻和而歌、爲變徵之聲、士皆垂淚涕泣」とある。荊軻が死を覚悟して旅立つ時、親友の高漸離が筑をかき鳴らし、荊軻はそれに和して「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」と歌ったとあるが、立庵の詩にある「筑離軻歌」とはこの時の情景を指す。この「輓六士詩」の初見の史料は、明治三年（一八九八）一月の『亞東時報』第四号であり、深山虎太郎の名で「輓六士七律六首」と題して掲載された<sup>26</sup>。字句上に多少の相違はあるものの、詩鈔及び遺稿に収録されているものと基本的には同じ内容である。掲載時期から見て、恐らく常熟から上海に戻った直後に制作したものである。立庵の「輓六士詩」について、宋恕は評語の中で「悲壯蒼涼<sup>27</sup>」と評し、章炳麟は「奇肆崛岉、無大白不能讀、無鉄板不能歌<sup>28</sup>」と絶賛する。因みに、ここで章が言う「大白」とは、漢語に「浮一大白」という成語があるように、酒のことであり、「鉄板」とは鉄綽板とも言い、古代中国において歌唱時に用いた伴奏用の器具を指す。また周岸登は立庵の「輓六士詩」への評語の中で「六士成仁之日、余曾目擊悲痛之極、只在青蓮庵伏裴邨先生棺一哭、每欲誅行写哀、至今不能成一字。讀立庵詩怦怦然、動三步腹痛之感矣<sup>29</sup>」と記している。

周岸登（一八七二—一九四二）は、四川省威遠県の人。字は道援、号は癸叔。光緒一八年（一八九二）に郷試に合格して



挙人となり、清末期には広西省陽朔、蒼梧二県の知県に就任。主な著作に『蜀雅』全一二卷（民国二〇年、一九三一年刊）がある。周の評語にある「裴邨」とは、処刑された「六君子」の一人劉光第（一八五九—一八九八）の号であるが、劉は詩人としても有名であり、また周岸登と同じ四川省出身でもあることから、生前より周とは何らかの親交があつたものと考えられてよいであろう。変法維新運動の挫折後、維新派を支持していた清国の紳士が、刑死した「六君子」について輓詩を書き残したケースはいくつか確認できるが、日本人で「六君子」に輓詩を書いたのは、管見の限りでは立庵のみである。いずれにせよ、変法維新運動の挫折が、中国の改良派はもちろん、日本の興亜論者にとつても、大きな衝撃であつたことをうかがわせる。

以下は丁祖蔭が一〇月二三日（旧曆九月七日）に常熟で立庵に送った詩であるが、そこには丁、立庵両者の清国をめぐる時事問題に対する見解が投影されている。

九月七日贈山根虎臣<sup>(31)</sup>（丁祖蔭）

蕭然鸞鶴結芳隣

蕭然として 鸞鶴と芳隣を結び

家住青山不厭貧

家 青山に住みて 貧しきを厭わず

黑夜常摩詩酒罍

黑夜 常に摩す 詩酒の罍

白雲無礙薛蘿身

白雲 礙ぐる事無し 薛蘿の身

新亭泣血空傷晋

新亭の泣血 空しく晋を傷み

東海激流肯帝秦

東海の激流 肯えて秦を帝となさん

願訂十年聯袂約

願わくは訂せん 十年聯袂の約

與君同飽五湖春

君と共に飽かん 五湖の春

第一聯と第二聯では、自由奔放で詩酒を好んだ立庵の中国での生活を描写している。第五句の「新亭」に関しては、『世説新語』言語編に「過江諸人、每至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯中坐而嘆曰風景不殊、正自有山河之異。皆相視流淚。唯王丞相愀然亮色曰當共戮力王室、克復神州、何至作楚囚相對」とある。東晋初年、江南に逃れてきた晋の遺臣達が新亭に会し、故国晋を思いながら共に落涙したという故事であるが、丁詩の中では、壮志を抱く変法維新派を含む当時の憂国の士一般を指して言ったものであり、彼等の憂国の情が政府や社会に理解されないことに対する不満が吐露されている。また第六句の「東海激流」とは戦国時代の斉の魯仲連を指すと考えられる。『戦国策』には、魯仲連の言葉として「彼秦、棄礼儀、上首功之國也、權使其士、虜使其民、彼則肆然而為帝、過而遂正於天下、則連有赴東海而死耳、吾不忍為之民也」とある。魯仲連が遊歴先の趙で、魏の使者である新垣衍に対し、秦の称帝を容認して、その臣民になるくらいなら、東海に身を投じて死ぬのみであると語ったという故事であるが、丁詩の中では、明治三〇年（一八九七）末以降、領土の強制租借により中国分割を進めていた西洋列強を「秦」に例えたものと看做すことができ、列強の政策に対する不屈の精神を吐露したものである。つまり当時の時勢から察して、「新亭泣血空傷晋、東海激流肯帝秦」とは、変法運動を弾圧した清朝政府と中国分割競争を進める西洋列強の両者に対する強烈な不満を述べた句であり、在野の改良派の立場からの憂国の至情が見て取れる。

また「虞山唱酬集」には、立庵と凶南が常熟を離れる直前に丁が二人に贈ったと思われる次のような詩も掲載されている。

感懷贈山根虎臣荒井益<sup>(32)</sup>（丁祖蔭）

方従杯酒識英雄

方に杯酒に從いて英雄を識り

文字論交肝胆通

世界已成顛倒夢

人生俱是可憐蟲

東来海水群飛日

南渡江山醉舞中

差喜騎鯨瀛島客

尚余長劍倚蒼空

文字論交し 肝胆かんたん通ず世界すて已成れり 顛倒の夢人生じんじゆ俱にこれ 可憐の蟲東来 海水 群飛ぐんびする日南渡 江山 醉舞すいむの中差喜やぶは 鯨に騎りたる瀛島えいとうの客尚なほ長劍を余あまして 蒼空そうに倚よる

丁はこの詩の中でも、立庵、凶南二人の識見と気概に対して敬意を表すと共に、国際情勢の急変と清朝政府の態度に対する不満を述べている。当時の政治情勢から察して、「東来海水群飛日、南渡江山醉舞中」の一聯は、群飛するように迫り来る外患とそのような時勢においても尚醉夢から覚めない清朝政府を言ったものであろう。この一聯からも、明治三〇年（一八九七）一月のドイツの膠州湾占領に端を發した列強による中国分割競争の激化とそれに対する清朝政府の無為無策という事態が、常熟のエリート層において重く受け止められていたことがうかがえる。丁は第二句で、立庵と凶南に対し「文字論交肝胆通」と述べているが、この間、三人の間で清国をめぐる時事問題について多くの議論がもたれたことは想像に難くない。<sup>(33)</sup>特に「肝胆通ず」とある点は、丁、立庵、凶南三者の当時の清国情勢に対する認識が基本的に一致していたことを意味しており、したがって丁が国際情勢や清国政府に対して抱いた危機意識や不満は立庵や凶南にも共有されていたものと考えてよいと思われる。

立庵は丁詩に和韻し、次のように詠じている。

次韵酬丁祖蔭<sup>(34)</sup>（立庵）

胆気独依牛背雄

河汾讲学笑王通

万言文字连春蚓

絶代著书委蠹虫

何若酣歌樽酒侧

任他醉倒绮罗中

真龍千古竟難起

大息晋陽紫氣空

胆気 独り依ぶ 牛背の雄

河汾に学を講じ 王通を笑う

万言の文字 春蚓を連ね

絶代の著書 蠹虫に委す

何ぞ 酣歌樽酒の側に若かん

任他 醉倒せん 綺羅の中

真龍 千古 竟に起き難く

大息す 晋陽 紫氣の空しきを

第一聯の「牛背雄」とは隋末、煬帝に反旗を翻した李密のことであり、同じく「王通」も隋末の大儒であるが、ここでは丁が両者に勝る気概と才知を備えているとして賛美したものである。第二聯では丁の熱心な著述活動を詠じているが、同時にその「絶代の著書」が国難を救うには至らないことを嘆き惜しんでいる。第三聯は、その字面の意味とは裏腹に、清国の時勢に対する哀感と遣る瀬無さが託された表現として読むべきである。第四聯の「真龍」は国難を救う英雄、ここでは清朝の近代的改革を担う人物を言ったものである。「晋陽」は唐高祖李淵が初めて武装決起した場所であるから、その「紫氣」即ち帝王の気が「空」であるというのは、清朝の国運の衰退を言ったものであり、立庵はその現状を歎いているわけである。一方、図南は丁詩に対し、次のように酬答している。

次韵答丁芝孫<sup>(35)</sup>（図南）

論兵談劍意英雄

肝胆真従一見通

列国方為負嶠虎

諸公惟学叩頭蟲

新亭名士煙波外

旧国江山荆棘中

安得與君同上馬

指揮忽見虜城空

論兵 談劍 意 英雄たり

肝胆 真に従い 一見して通ず

列国方に為る 負嶠の虎

諸公惟だ学ぶ 叩頭の蟲

新亭 名士 煙波の外

旧国 江山 荆棘の中

安くんぞ君と同一に上馬するを得んや

指揮せば忽ち見ん 虜城の空しきを

この詩は『函南遺稿』巻三にも収録されているが、その内容は丁詩と同じく、列強の強硬な占領政策とそれに対し妥協的な態度をとり続ける清朝政府を叱責したものであり、特に第四聯で、丁と共に奮起し、欧米の政策に対抗する意思を表明している点が注目されよう。

### 三 清国文人の立庵への評価

立庵は辛亥革命直前の明治四四年（一九一〇）八月、病により山口県萩にて死去した。その六年後の大正六年（一九一七）五月、東亜実進社から『立庵遺稿』が刊行された。遺稿には丁祖蔭と周岸登の二人がそれぞれ序を寄せている。丁序は、立庵が死去した翌年の民国元年（大正元、一九一〇）八月に書かれたもので、初めての虞山での交遊からすでに一四年の年月が過ぎており、時に丁は辛亥革命後の混乱の中、県内の紳士層の推挙により、常熟県の民政長に就任していた。丁序



の全文は以下の通りである。

兪曲園先生序東瀛詩選、嘗曰假鉛槧之事與東瀛諸君子結文字因緣、其中所述往往於姓氏之下略記其出處大概、學問源流。可見詩文深契、異地同揆。其間偉人傑士聯袂來遊、抒其所得、以播為聲歌、形諸楮墨、固為我邦人士心醉也久矣。立庵先生詩壇之盟主、文界之鉅子也。余嘗獲與交、每當春榭樽開、秋山屐冷時、得追隨其際、一聆言論以為快。及退而讀其詩、則杜老傷秋之意、放翁憂國之思、輒流露於字裏行間、令人俯仰悲歌而不能置、乃恍然於立庵先生之為真詩人真志士也。当余獲交先生之際起、視吾國文明進化尚在萌芽、能以提倡改革為己任者、曾有幾人。先生一東垂寓公、独能託論說以諷時、著詩文以警世、不惜大聲疾呼、為吾國人士作当头棒、清夜鐘。此余所引為知己而竊用自愧者也。今不見先生也久矣。偶獲其片羽吉光、零金碎玉、諷誦一過、猶能髣髴生平、然終以未窺全豹為憾也。今秋承海津先生之介紹、得讀先生詩鈔、知先生湖海遨遊、滄桑涕淚、具一腔熱血隨地傾瀉。元龍豪氣耶、屈子牢愁耶。是直可當詩史讀已。乃東瀛諸同志復欲広集先生曩日登載報章之論說、以至生平詩文及其尺牘、裒集遺稿、蔚為大觀。且以序屬余、余不文、顧不獲辭、爰抽餘晷謹弁高文。非敢謂區區數言足表先生於万一也、亦聊如曲園所云與東瀛諸君子結文字因緣已爾。嗟乎、十年旧夢曾挑夜雨之燈、一卷新詩送到清風之句。湖山如昔、墓草已陳。是又讀先生之零篇剩墨而神往於虛廓張筵、劍門躡屐時也。乃不揣固陋而為之序。

民國紀元壬子秋八月常熟丁祖蔭芝孫識於民政署齋<sup>36</sup>

丁は、民国元年（一九一二）秋、在華日本人海津の紹介により、同年一月に刊行された『立庵詩鈔』を読む機会を得、その後、立庵の生前の詩文を収集していた日本人から、遺稿の序の執筆を依頼されたという。冒頭にある「兪曲園」は『東瀛詩選』を編集した清末の学者兪樾<sup>37</sup>のこと。丁序は立庵について「詩壇の盟主、文界の鉅子」と評しているが、同時に「先

生、一東亜の寓公にして、独り能く論説に託して以て時を諷し、詩文を著して以て世を警す。惜しまず大聲疾呼し、吾国人士のため当头棒、清夜鐘を作す。これ余引いて知己となし、竊かに用って自ら愧じる所の者なり」と述べており、清末の知識人達からは、漢詩人としてだけでなく、変法改革の熱心な支持者・実践者としても広く認知されていたようである。まさにそのような清国の人士と艱難を共にする姿勢こそが、立庵を知己と看做し、敬重する所以であったと丁序は述べている。

一方、周岸登は序の中で立庵について以下のように書き記している。

(前略) 山根立庵日本志士也、為東時報主筆。其遨遊我邦、與都人士相往還、幾十易寒暑矣。余耳其名、且夙誦其詩、未伸良覲、竊引為憾。今得披其全稿、慷慨激昂、離奇倜儻、聲震金石、韻流管弦(中略) 関懷大局、不惜大聲疾呼、醒黃人之噩夢、慮欧力之東侵、發為詩歌、長言永歎。此又立庵激切之隱衷、每流露於篇什中者也。竊願壇坫名流、鴻博君子、發揚蹈厲、共表同情。讀立庵之詩、際此滄海橫流、競爭激烈、国恥未雪、大厦將傾、當有惘然而悲、憤然而起者矣。郵書誦序、爰述后言、聊備二国輜軒之故實、亦以為予與立庵文字神交之左券云耳。<sup>(38)</sup>

これはもともと『立庵詩鈔』の序であったが、西田鳴溪もしくは白岩龍平が『立庵遺稿』を編集する際に、遺稿の序として再収録したものである。「未伸良覲、竊引為憾」とあることから、周と立庵との間に直接の面識はなかったようであるが、詩鈔及び遺稿所収の詩の評語は、そのほとんどがこの周岸登によって執筆されたものである。周がどのような経緯で、詩鈔に序や評語を寄せることになったのかは定かでないが、周がこの序を書いたのは、立庵がまだ健在であった明治三八年(光緒三一、一九〇五)の春であり、右の序に「郵書誦序、爰述后言」と記されていることから、おそらく立庵が書簡で、自らの詩稿の序文及び評語の執筆を周に依頼したものであろう。右に引用した周序には、立庵の漢詩及び彼が掲げる興亜主義への周自身の傾倒ぶりがよく表れている。

## おわりに

小論では、山根立庵の清国渡航後の漢詩、特に江蘇常熟の丁祖蔭との間で贈答、唱和された漢詩を中心に考察を行った。それらの詩は明治三十一年（一八九八）九月の戊戌政変直後に唱和されたものであり、そこには立庵、丁祖蔭等の親交ぶりとともに、戊戌政変や清国をめぐる国際情勢に対する認識が投影されていることを明らかにした。常熟での丁との交遊に関しては、「虞山唱酬集」所収の二〇数首の漢詩しか残されていないため、この時両者の間でもたれた議論の詳細については知る由もないが、残された贈答詩、唱酬詩の内容からは、立庵や凶南が西洋列強による清国分割とそれに対する清朝政府の妥協的な態度及び変法運動に対する清朝政府の圧殺という事実を、丁と共に極めて批判的にとらえていた様子がうかがえる。換言すれば、そこには立庵及び凶南の変法改革への支持や西洋列強のアジア侵入への対抗を基調とした興亜論的な思想傾向が端的に示されているとも言えよう。変法維新を積極的に支持し、清国とともに興亜を実現しようとする対外的態度は、白岩龍平をはじめ当時の多くの在華日本人達に共有されていたものであり、それは立庵自身が書いた『亜東時報』の論説や『立庵遺稿』に収められている他の詩作などからも十分うかがうことができる。一方、日清戦争後の中国では変法の機運が高まる中、一部の知識人の間では、対外認識の面で日本の興亜論に同調する雰囲気醸成されていた<sup>39</sup>。そのことが興亜主義を掲げて中国で論陣を張った立庵への評価へとつながった側面も見逃せないであろう。

立庵が清国滞在中、具体的にどのような言論活動を展開し、清国の輿論にどのような影響を与えたのか、という点に関しては、『亜東時報』全体の分析も含めて、今後の研究の中であらためて論じていきたい。

注

- (1) 中下正治『新聞に見る日中関係史』研文出版、一九九六年。
- (2) 中村義『白岩龍平日記——アジア主義実業家の生涯』研文出版、一九九九年。
- (3) 『亜東時報』第一号、明治三十二年六月二十五日、一—二頁。立庵はこの序の中で、「同文之邦」である日中両国は、明治四年の日清修好条規締結時に「唇齒之誼」を結んだが、その後台湾、琉球をめぐって相争い、日清戦争にまで発展した。西力東漸の危機の下、同じアジアに属する日清両国は本来協力して欧米諸国に対抗し、「興亜之大計」を講じなければならぬのに、このように兄弟が干戈を交え、血を流すに至ったのは、悲惨の極みである。それは両国国民の志が通っておらず、互いの言語、人情、制度、学術に関する理解が欠如していたからである。今後、両国国民は互いの志を通わせ、交誼を敦くし、「興亜」のために共に努力していかなければならない。そこで『亜東時報』を発刊して、「両国民の志を通わせたい」と述べている。これは初期アジア主義者による文化共同体的志向に立脚した興亜論といえよう。
- (4) 東亜同文会編『対支回顧録』上巻、原書房、一九六八年、七一—六頁。立庵の事跡に関しては『対支回顧録』及び『東亜先覚志士記伝』所収の列伝が参考になる。恐らくこの二つが立庵に関するほとんど唯一の伝記資料といえる。例えば、『東亜先覚志士記伝』は、上海渡航後の立庵について、「亜東時報に筆を執るに及び、その学問文章は忽ち支那の読書人の間に認められ、練達自在の漢文は王昭や章炳麟をして、日本人にして時文を善くする此の如き者あるかと讚歎せしめた。操觚を以て南方支那人を教化したるもの彼の如きは未だ曾て無しと称せられる」との評価を与えている。
- (5) 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』（研文出版、一九八九年）第四章「異邦人として」。
- (6) 入谷仙介「山根立庵初期詩注釈」、『アジアの歴史と文化』（山口大学アジア歴史文化研究会）第五号、二〇〇一年五月。
- (7) 『立庵遺稿』白岩龍平跋（『立庵遺稿』下巻、六六頁）
- (8) 『対支回顧録』下巻、九七六—九七七頁。
- (9) 注（8）、九七八頁。
- (10) 『東亜先覚志士記伝』下巻、二二八頁。
- (11) 宋恕撰「贈山根立庵」、胡珠生編『宋恕集』中華書局、一九九三年、八二—一頁。
- (12) 永井禾原『西游詩統稿』巻一の一八頁及び巻二の三二頁。一首目の「綬経」は『訳書公会報』の創刊者の一人董康、「伯元」は『遊戲報』の創刊者李伯元、「惜香」は駐上海総領事小田切万寿之助、「淮陰」は大阪朝日新聞社上海特派員牧卷次郎を指す。また二首目の「汪甘卿」は文廷式の門人汪鍾霖を指し、「文実甫」は文廷式の弟の文廷華のことである。
- (13) 拙稿「清末江蘇省常熟的地方自治思潮與留日学生——『徐兆璋日記』相関内容述評」、王勇編『中日関係の歴史軌跡』、上海辞書出版社、二〇一〇年。同「常熟図書館所蔵『徐兆璋日記』稿本の日本留学関連記事について」『東アジア文化環流』（東方書店）第二編第二号（通巻第四号）、二〇〇九年七月。

- (14) 南京図書館蔵『常熟丁府君墓志銘』拓本。
- (15) 『閩南遺稿』に關しては、拙稿「荒井甲子之助の中國觀——『閩南遺稿』を中心に」（『千葉史学』五九号、二〇一一年二月）を参照のこと。
- (16) 『閩南遺稿』山根虎臣序（南京図書館蔵『閩南遺稿』、一九〇三年二月、三頁）。
- (17) 丁祖蔭、徐兆璋等編『重修常昭合志』卷九、学校志、三七頁。尚、引用文にある「昭文」とは、雍正年間に常熟県の東境に置かれた昭文県のことであり、両県は常昭両邑として一括管理の下に置かれていた。辛亥革命後は合併し、名称も常熟県に統一された。
- (18) 「虞山唱酬集」『立庵遺稿』卷二、二三頁。
- (19) 「晴嵐雨読園贖稿」『立庵詩鈔』卷上、二一一—二二頁。
- (20) 注（18）に同じ。
- (21) 注（18）、二五頁。
- (22) 注（18）、二六頁。
- (23) 館森袖海撰「姑蘇記遊」、「拙存園叢稿」卷一、一七一—一八頁。
- (24) 注（18）、二三頁。
- (25) 「晴嵐雨読園贖稿」『立庵詩鈔』卷上、二二—二三頁及び『立庵遺稿』卷一、一三一—一四頁。
- (26) 『亞東時報』第四号、明治三二年一月一日、二七—二八頁。
- (27) 「晴嵐雨読園贖稿」『立庵遺稿』卷一、一四頁。
- (28) 注（27）に同じ。
- (29) 注（27）、一五頁。
- (30) 例えば、宋恕は「哭六烈士」（『宋恕集』中華書局、一九九三年、八一—八二頁）と題した輓詩を残しているし、鄒容も「題譚嗣同遺像」（『鄒容集』重慶出版社、一九八三年、三六頁）を書いて、譚嗣同を吊っている。それ以外にも、唐才常、黃遵憲、孫宝宣等が輓詩や輓聯を書いている。
- (31) 注（18）、二六頁。
- (32) 注（18）、二七頁。
- (33) 丁は『閩南遺稿』に寄せた序の中で、「吾国人無愛國思想、無獨立精神、無自由性理、劣種之天成哉。嗚呼、戰國以降、俠氣微矣。一經專制之字下、思想以縛、精神以頹、性以喪、理以滅。日本同種之國而獨反是、與其士大夫游、皆俠氣發眉宇、旅游吾國者、如山根立庵、荒井閩南諸君子交尤密、數君固窮而在下者也。俠氣視維新諸傑不少減、扁舟相逢、一燈話旧、縱談天下事、常有不可一世之概。恍然於變法之効果、無一非俠氣所組成者」などと記しており、ここからも丁が立庵、閩南らと清國問題について、談論をしていた様子がうかがわれる。



(34) 注(18)、二七頁。

(35) 注(18)、二七頁。

(36) 『立庵遺稿』丁祖蔭序、一一二頁。

(37) 俞樾(一八二一・一九〇七)は清末の学者。号は曲園、浙江省德清の人。『東瀛詩選』は岸田吟香の依頼により、俞樾が編集した、正編四〇巻、補遺四巻、計四四巻から成る漢詩集で、日本の江戸時代から明治初期までの漢詩五千余首が漢詩人別に収録されている。また後に俞樾が撰した『東瀛詩記』(二巻)の序には、『東瀛詩選』の説明として「壬午之秋、余養疴吳下、有日本国人岸田国華以其国人所著詩集百数十家請余選定、初意欲以衰疾辭、既而思之、海內外習俗雖異、文字則同、余謬以虛名流播海外、遂得假鉛槧之事與東瀛諸君子結文字因緣、未始非暮年之一樂也、因受而不辭。自秋徂春凡五閱月選得詩五千余首、釐為四十巻、又補遺四巻、是為東瀛詩選。余每讀一集畧記其出処大概、學問源流、附於姓名之下」とある。

(38) 『立庵遺稿』周岸登序、三三頁。

(39) 例えば、光緒二三年(一八九七)正月、『時務報』に載せられた章炳麟の論説「論亞州宜為唇齒」は、清国と日本との關係を「唇亡齒寒」と評し、日本との提携により、列強、特にロシアに対抗することを主張している。また、『亞東時報』第一号には、立庵以外に汪康年の序(光緒二四年夏四月撰)が載せられているが、そこには「乙未以後、余始得與日本士大夫遊、聞其言論、盡然憫黃種之式微、以振興中國為己任。凡聘教習、興農桑、苟利於中國者、莫不罔也。戊戌之夏、乙未會員諸君相議、設亞東時報館於上海、月一出報、將以擴興亞之願、擊中國之蒙、志甚闕焉」と記されており、汪が在清活動家の興亞論に傾倒していた様子がうかがわれる。

【キーワード】

・山根立庵 ・丁祖蔭 ・立庵遺稿 ・虞山唱酬集 ・興亞

## Poems Exchanged between Yamane Ryūan and Ding Zuyin: With a Focus on Perceptions of Other Countries to Be Seen in Their Poems

Fukuda Tadayuki

This article examines the Chinese poems by the Meiji-era Japanese poet Yamane Ryūan 山根立庵 (1861–1911) after he went to Qing China, especially the poems that he exchanged with the Chinese intellectual Ding Zuyin 丁祖蔭 (1871–1930) of Jiangnan 江南. After his arrival in China, Ryūan associated with many writers and calligraphers on account of his outstanding knowledge of Chinese prose and poetry, and whereas in Japan he had been virtually unknown in Chinese poetry circles, he won high acclaim from Chinese scholar-officials.

Ryūan was on friendly terms with Shiraiwa Ryūhei 白岩龍平 (1870–1942), a businessman who had established a steamship company in China, and in June 1898 he founded the *Yadong shibao* 亞東時報 (*East Asia Times*) in Shanghai with Shiraiwa's assistance, and as its editor-in-chief he had some influence on contemporary public opinion in China. His views as expressed in the *Yadong shibao* were consistently underpinned by full support for China's political reform and self-reliance, and this can also be seen in the many Chinese poems that he wrote. The poems that he exchanged with Ding Zuyin are gathered together in the "Gusan shōshū shū" 虞山唱酬集 included in vol. 2 of the posthumous collection of his writings entitled *Ryūan ikō* 立庵遺稿. These poems were exchanged immediately after the One Hundred Days' Reform in September 1898, and along with their friendship they also reflect their perceptions of issues of the day, such as the One Hundred Days' Reform and the international situation regarding China.

In this article, I analyze the meaning of these poems and examine the friendship between Ryūan and Ding, and I point out that his ideas about the rise of Asia, based on his support for China's political reforms, can be inferred also from the poems that he exchanged with Ding. In addition, on the basis of the content of the forewords contributed by Ding Zuyin and Zhou Andeng 周岸登 to the *Ryūan ikō* I also consider the manner in which late-Qing intellectuals rated Ryūan as a writer of Chinese poems.

Keywords: Yamane Ryūan, Ding Zuyin, *Ryūan ikō*, "Gusan shōshū shū," rise of Asia